

第1章

「外国為替の仕組み」を  
理解しよう

- 001 「外国為替取引」とは「通貨と通貨を交換」すること ..... 13
- 002 世界の「三大通貨」が外国為替取引の基本通貨 ..... 14
- 003 取引量の多い5つの通貨が「メジャーカレンシー」 ..... 15
- 004 2つの国の通貨で1組となる通貨ペア ..... 16
- 005 世界の外国為替取引量は1日でおよそ300兆円 ..... 17
- 006 「円高・ドル安」「円安・ドル高」って、どういうこと? ..... 18
- 007 それでも分かりにくい? 「円高・ドル安」「円安・ドル高」 ..... 19
- 008 どんな目的で外国為替取引を利用しているの?【1】 ..... 20
- 009 どんな目的で外国為替取引を利用しているの?【2】 ..... 21
- 010 どんな目的で外国為替取引を利用しているの?【3】 ..... 22
- 011 24時間、世界を駆けめぐる外国為替市場 ..... 23
- 012 世界最大の金融市場だからメリットがいっぱい ..... 24

**コラム** ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール  
「円高」になると、どうして日本は不況になるの?【1】 ----- 25

## 第1章

## 「外国為替の仕組み」を理解しよう

## 001

「外国為替取引」とは  
「通貨と通貨を交換」すること

「外国為替取引」は海外旅行やインターネットの通販サイトでのショッピングで馴染みが深いもの。そして、モノを買ったり、サービスを受けたりする以外に、通貨と通貨を交換することで利益を求めようとするのがFX。難しそうに聞こえますが、実は日頃から慣れ親しんでいるものなのです。

日本からアメリカに旅行するときは、「円」を「ドル」に両替していきます。ヨーロッパに行くのであれば「円」を「ユーロ」に替えます。そして、旅行から帰ってくれば、手元に残った「ドル」や「ユーロ」を再び「円」に交換します。簡単に言うと、これが「外国為替取引」です。

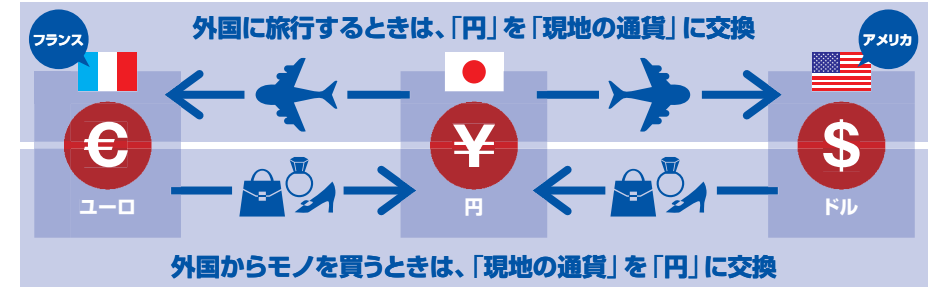
海外のショッピングサイトからインターネットを通じてブランド品などを買うときには、ほとんどの場合はクレジットカードでの決済ですから、あまり意識したことがないかもしれませんね。

## ▶▶外国為替取引はとても身近な存在

「外国為替取引」というと何か難しそうな感じがしますが、これは「通貨と通貨を交換すること」で、皆さんが日常生活で無意識のうちに活用しているとても身近な存在です。

企業が行う輸出や輸入にも「外国為替取引」が使われています。たとえば、トヨタやパナソニックが日本で生産した自動車や家電製品をアメリカ

## ▶生活に身近な「外国為替取引」



## ▶FX=通貨だけの「外国為替取引」



で売れば、その代金は米ドルで受け取ります。また、海外ブランド品や石油は海外から輸入していますが、その代金はドルやユーロなどの世界各国の通貨で支払われています。とはいえ、多くの場合は米ドルが主役です。

## ▶▶モノやサービスを伴わない「通貨だけの交換」の1つがFX

このように、モノを買ったり、サービスを受けたりするために、それぞれの国の通貨と交換するのが「外国為替取引」の一般的な使い方です。ところが、モノやサービスのやりとりを伴わない、通貨と通貨の交換だけを目的とした取引があります。その1つがFX（外国為替証拠金取引）です。旅行から帰ってきてドルを円に替えるとき、意外にも、思ったよりたくさん受け取れたりしますよね。あれは「為替差益」というものです。

この第1章では、「外国為替取引」の仕組みについて、詳しく解説していきます。初めて耳にする方は、とても難しそうに聞こえるかもしれませんが、慣れれば何も難しいことはありません。じっくり、いきましょう。

## 第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

## 002

世界の「三大通貨」が  
外国為替取引の基本通貨

「ドル」「ユーロ」「円」は世界の三大通貨といわれ、非常に信頼性が高い通貨とされています。中でも、最大の取引量を誇るアメリカの「ドル」は、基軸通貨として貿易などで幅広く使われています。最近、注目されつつある中国の「人民元」を含め、世界の四大通貨となる日も近いでしょう。

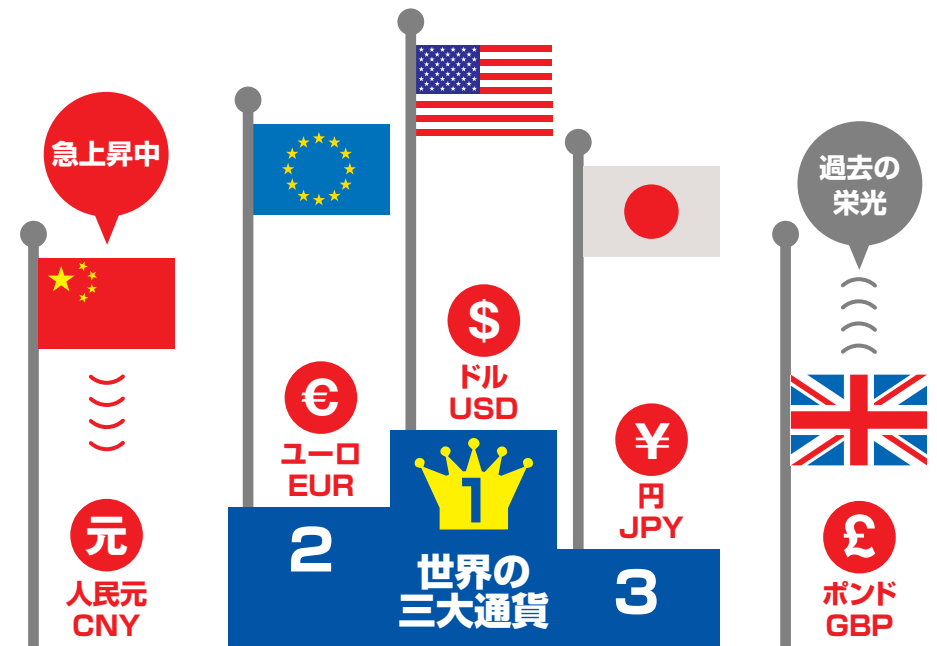
国には、それぞれ固有の象徴として「国旗」や「言語」などがあります。そして、経済面の象徴が「通貨」です。

そこで、主要な国の通貨には、どのようなものがあるのかを解説しましょう。といっても、皆さんが取引する通貨は非常に限られていますから、試験勉強のように丸暗記をする必要はありません。

## ▶▶世界の三大通貨

通貨は、経済面で「国の信頼性」を測るモノサシです。つまり、**経済が安定していて、取引（流通）量が多い通貨ほど信頼性は高い**といえます。その代表的な存在がアメリカの「ドル」。一般に、米ドルなどといわれますが、外国為替取引の世界では単純に「ドル」といえば米ドルを指し、アルファベット3文字で表記される略称は「USD」です。

「ドル」は「基軸通貨」として、国際的な貿易などの決済に広く使われています。決済というと、取っつきづらかもしれませんが、要は、お金



の支払いや受け取りをすることです。世界的なお金のやりとりに使われる通貨ですから、当然、流通量は最も多くなります。

基軸通貨といえば、以前はイギリスのポンドでしたが、第二次世界大戦以降、アメリカの国力が大きくなる一方、イギリスの国力は衰え、基軸通貨はポンドからドルへと移りました。

次に取引量の多いのが「ユーロ (EUR)」。1999年1月1日に西側ヨーロッパ諸国を中心に経済圏を欧州連合 (2012年1月1日現在、27カ国が加盟) として統一したのを機に誕生。ユーロは通貨としての歴史は浅いものの、参加国は17カ国 (2012年1月1日現在) を数え、取引量は世界第2位です。ただ、ギリシャの財政危機を発端にユーロの信頼性が危ぶまれています。

そして、第3位が日本の「円 (JPY)」。日本にいと、「20年以上も景気が回復せず、国と地方の借金は1000兆円にも及ぶ国の通貨が、なぜ信頼性が高いの?」と感じるかもしれません。この点については、追々、説明するとして、「円」も信頼性が高く、流通量が多い通貨と覚えてください。

## 第1章

## 「外国為替の仕組み」を理解しよう

## 003

取引量の多い5つの通貨が  
「メジャーカレンシー」

ドル、ユーロ、円にイギリスのポンド、スイスのフランを加えた主要通貨がメジャーカレンシー、それ以外の通貨はマイナーカレンシーです。どれも特色があり、特にマイナーカレンシーは個性豊か。いろいろな通貨があって目移りしそうですが、取引はメジャーカレンシーから始めましょう。

前項で紹介した「ドル」「ユーロ」「円」は取引量が非常に多く、イギリスの「ポンド (GBP)」、スイスの「フラン (CHF)」とあわせて取引量の多い上位5つの通貨を「メジャーカレンシー (主要通貨)」といいます。オーストラリア (豪州) の「オーストラリアドル=豪ドル (AUD)」をメジャーカレンシーに含めることもあります。ちなみに、豪ドルの愛称は「オージー」です。

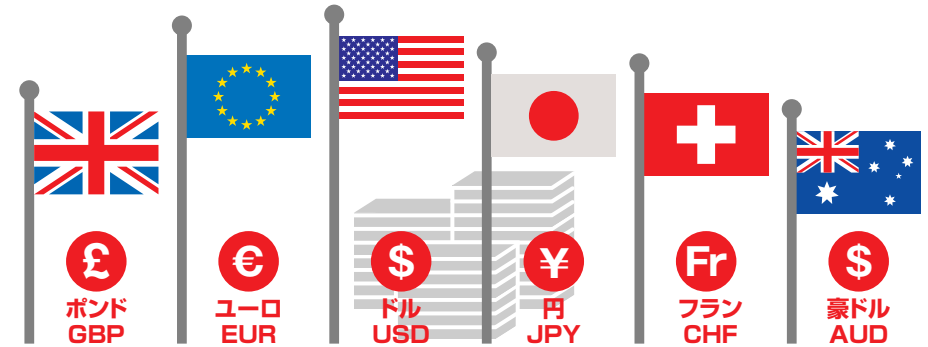
いずれにしても、皆さんがFXを使って取引をするときは、豪ドルを含むメジャーカレンシーから始めるとよいでしょう。

## ▶▶ 個性的なマイナーカレンシー

メジャーカレンシーに比べて、取引量はかなり少ない通貨をマイナーカレンシーといいます。豪ドルを含む6つのメジャーカレンシーに対して、その他大勢というところでしょうか。

しかし、マイナーな分、国、通貨としても個性的。たとえば、ニュージ

## ▶メジャーカレンシー(通貨)



## ▶主なマイナーカレンシー(通貨)



ーランドの「ニュージーランドドル=NZドル (NZD)」はオーストラリアに近接する島国で、人より羊の数が多いいわれるほどの農業国。愛称は「キウイー」。豪ドルとあわせて「オセアニア通貨」といいます。

このほか、カナダ (加州) は「カナダドル=加ドル (CAD)」で、愛称は「キヤンドル」。カナダは隣接するアメリカ経済の影響を強く受ける一方、資源産出国としての性格を持つユニークな存在です。

マニアクなところでは、南アフリカ (南ア) の「南アランド (ZAR)」、香港の「香港ドル (HKD)」、シンガポールの「シンガポールドル (SGD)」、タイの「バーツ (THB)」、トルコの「リラ (TRY)」なども、取引を始めると、お目にかかれるかもしれません。

なお、中国やブラジル、ロシアといった新興国の通貨は、政府が取引を制限していたり、経済が未成熟だったりして、多くのFX会社では取り扱い銘柄として採用していません。取引量が極端に少ない通貨は入門したばかりの投資家には不向きですし、実際に取引をしている人はごく少数です。

## 第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

## 004

2つの国の通貨で  
1組となる通貨ペア

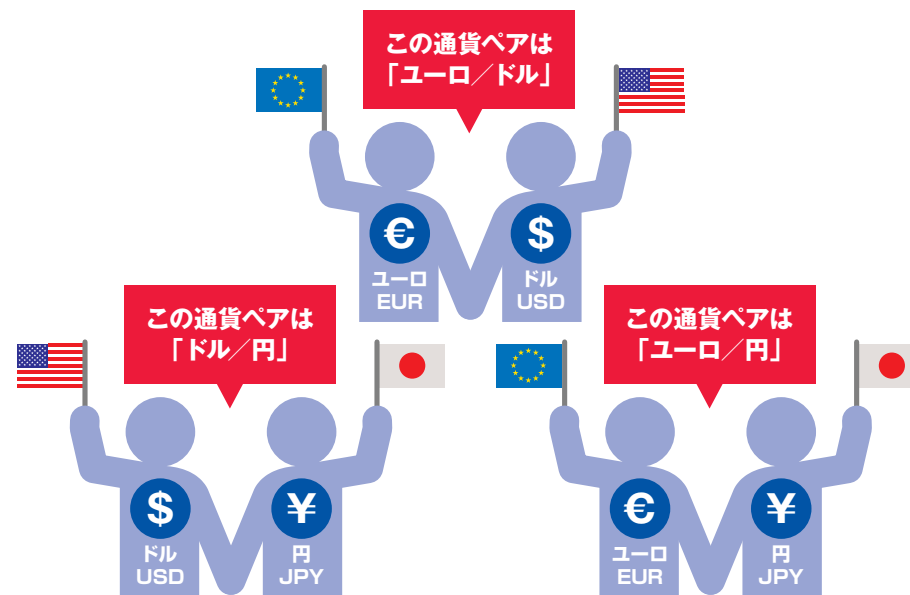
外国為替は必ず2つの通貨がペアになります。「ドル/円」「ユーロ/ドル」といった具合にです。単なる読み方だけでなく、先に来る通貨と後にくる通貨には決まりがあり、単位も決まっています。これを逆さまに覚えてしまうと一大事。しっかり、覚えましょう。

外国為替取引は、2つの国の通貨が対象になります。「為替」には「交換する」という意味があり、1つの通貨だけで取引することはできません。たとえば、海外旅行に行くために両替をするときには、「円」を「ドル」に交換したり、「円」を「ユーロ」に交換したりします。アメリカに住んでいる人がユーロ加盟国に行くときには、「ドル」を「ユーロ」に両替します。

このように、2つの通貨が必ずペアになることから、**ユーロとドルや、ドルと円といった組み合わせを「通貨ペア」と**いいます。そして、通貨ペアの名称にも決まりがあります。

ドルと円の組み合わせを「ドル/円」、ユーロとドルの組み合わせを「ユーロ/ドル」といって、それぞれ「USD/JPY」「EUR/USD」と表記します。FX会社や専門家によっては「/」を入れないときもあります。また、日本の新聞やテレビでは、「円ドル」「円ユーロ」と通常とは逆さまに表記したり、コメントしたりすることがありますが、外国為替取引の世

## 外国為替取引は2つの国の通貨が必ずペアになる



界では、この表記方法は例外といえるでしょう。

## ▶▶ちょっと迷う通貨ペアの名前と為替レートの関係

「ドル/円」「ユーロ/ドル」と表記するには理由があります。たとえば、ドル/円の場合、「ドルが円に対して高いか安いかわかる」を見ます。つまり、**通貨ペアの表記で先にくる通貨が「主」、後にくる通貨が「客」**です。したがって、「円ドル」という表記は主客転倒となり、本来の意味とは違ってしまいます。そして、単位は後にくる通貨で数えます。「ドル/円」の単位は「円」、「ユーロ/ドル」なら「ドル」となります。

後述しますが、よく「円高・ドル安」という見出し記事を目にすることがあります。外国為替取引を始めようとする個人投資家が最初につまずくのが、「ドルが円に対して、高いか安いかわかる」ということと、「円高・ドル安」という表記です。慣れていないと何のことやらさっぱり分からないかもしれませんが、あとでじっくり解説しますから、安心してくださいね。

## 第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

## 005

世界の外国為替取引量は  
1日でおよそ300兆円

世界の経済が拡大すればするほど、外国為替市場も大きくなっていきます。また、各国の経済状況によって通貨ペアの取引量も変わります。通貨ペアの取引量が多ければ、それだけ値動きが安定するため、初心者の方は、取引量の多い通貨ペアを選ぶのが利益をあげる秘訣です。

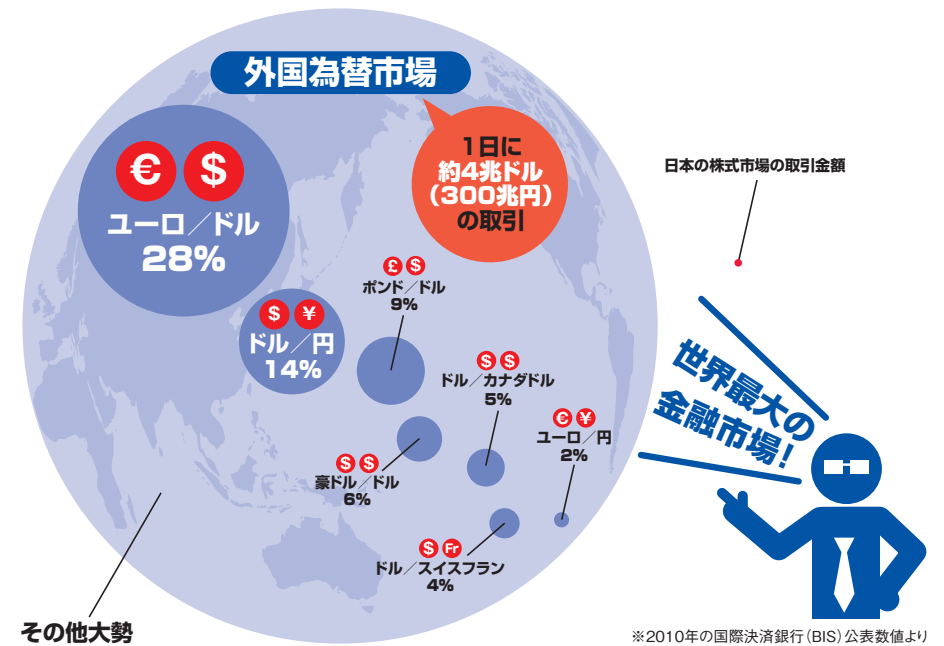
ドルやユーロ、円など通貨ごとの流通量について触れましたが、通貨ペアには取引量があります。外国為替取引をする上で、通貨ペアごとの取引量やその順番を知っておくことはとても重要です。

というのも、通貨ごとの流通量はあくまでも総量で、たとえば、ドル／円とドル／香港ドルの取引量は大きく異なるからです。FXの入門書などには、この点を簡単にしか触れていないことが多いため、多くの個人投資家が通貨ペアごとの取引量を軽視する傾向があります。

この点は、**皆さんが実際にFXを始めてから、うまく儲けられるか儲けられないかを左右する重要なこと**ですが、あまり突っ込んだ話は小難しいので、折に触れて説明します。ここでは、「**通貨ペアごとに取引量は異なり、それが非常に重要だ**」ということだけを理解しておいてください。

## ▶▶ 世界最大の取引量を誇るユーロ／ドル

当たり前のことですが、それぞれ単体の通貨として流通量が多ければ、



通貨ペアとして組み合わせたときも、取引量は多くなります。世界最大の取引量を誇るのが「ユーロ／ドル」です。

世界の外国為替取引の規模は1日でおよそ4兆ドル、日本円にしてざっと300兆円にのぼり、その3割弱 (28%) をユーロ／ドルの取引が占めています。2010年12月時点で世界第2位の取引量は「ドル／円」で約14%、次いでポンド／ドル (9%)、豪ドル／ドル (6%)、ドル／カナダドル (5%)、ドル／スイスフラン (4%) と続きます。意外なのが「ユーロ／円」。1つの通貨としての流通量は第2位と第3位なのに、通貨ペアとしてはその他大勢に近く、取引量は全体の2%にとどまっています。

メジャーカレンシー同士の組み合わせでも取引量にこれだけの違いがあるわけですから、ドルとマイナーカレンシーの組み合わせでは取引量が極端に少ないことは簡単に想像できるでしょう。なお、これらのデータは、国際決済銀行 (BIS) が3年ごとに集計・公表しています。2010年公表のデータでは、ドル／スイスフランとドル／カナダドルが逆転しました。

## 第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

## 006

「円高・ドル安」「円安・ドル高」  
って、どういうこと？

外国為替取引を始めると、最初に分からなくなるのが「円高・ドル安」の仕組み。考えれば考えるほど分からなくなります。こういうときは海外旅行に行ったり、海外のブランド品を買ったりするときのことを考えれば分かりやすいでしょう。円高のときは、海外旅行に行きやすいですよ。

テレビのニュース番組では「今日の為替は円高・ドル安傾向で、1ドル80円で推移しています」「1ドル80銭の円高です」といったコメントを耳にします。この「円高・ドル安」とは、どういう意味でしょうか？

すでに書いたように、外国為替取引は必ず、ドル／円やユーロ／ドルといった通貨ペアで行います。つまり、ドルと円、ユーロとドルでは、どちらかが上がれば、どちらかが下がるわけで、綱引きのようなもの。ですから、「円が高くなれば、相手のドルは安くなる」わけです。

ところが、「4年前には120円くらいしていたドル／円が、最近では75円くらいになったのに、円高ってどういうこと？ 120円から75円に下がったんだから円安なんじゃないの？」と、頭の中は「??？」だらけになってしまう方が多いようです。

## ▶▶円高なら海外旅行に行きやすくなる!!

この疑問を解決するには、通貨ペアと為替レートとの関係を整理しなくて



はなりません。004項で解説したように、「ドル／円」というときには、ドルが主ですから、「ドルが円に対して高いのか安いのか」を意味します。もう少し詳しく説明すると、「ドルが高い、円が安い」というのは、ドルと円を両替（交換）するときのことを考えれば分かりやすいでしょう。

たとえば、今、為替レートが1ドル100円だったとします。2年後に1ドル200円になっていれば、皆さんは海外旅行に行ったり、ブランド品を買ったりすることをためらうでしょう。なぜなら、1ドルを手にするために以前なら100円だったものが、200円も出さないといけなくなるからです。出費はこれまでの2倍。つまり、「円安・ドル高」は「ドルの価値が上がり、円の価値が下がる」ということなのです。

逆に、為替レートが1ドル50円になれば、100円のとくに比べて、半分の出費で済みますし、より多くのものを買うことができます。つまり、「円高・ドル安」は「円の価値が上がり、ドルの価値が下がる」ということです。少しは、頭の中を整理することができたのではないのでしょうか。

## 第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

## 007

それでも分かりにくい？  
「円高・ドル安」「円安・ドル高」

日本にいて、円高は常に「不況」とセットで扱われ、イメージはあまりよくありません。しかし、資源や輸入食品、ブランド品などが安く買えるようになるメリットもあります。「円高・ドル安」「円安・ドル高」の仕組みは、どちらか一方を軸にして覚えると、比較的簡単に理解できます。

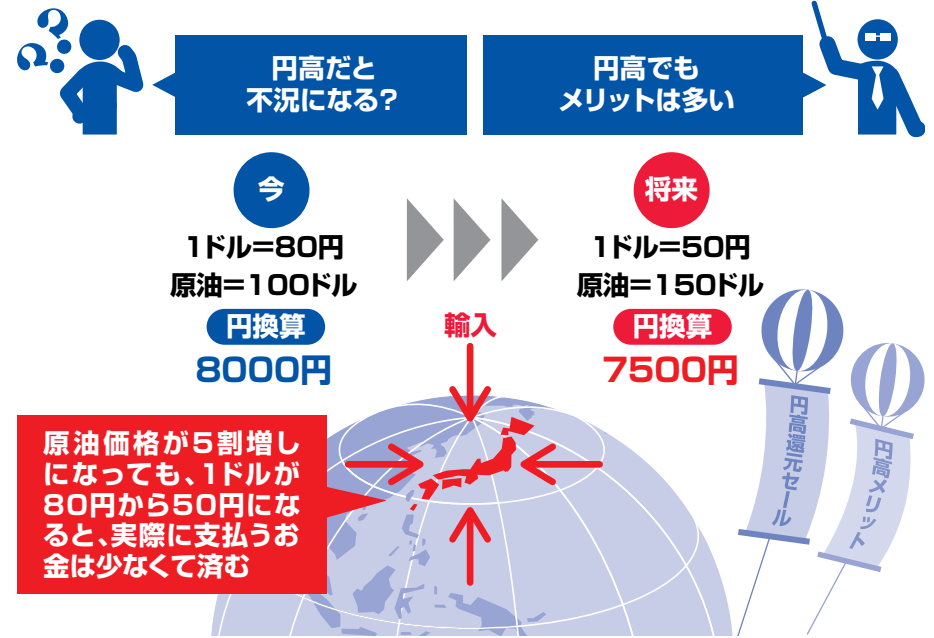
「円高・ドル安だと海外旅行に行きやすくなるというのは分かるけど、為替レートが下がっているのに円高ってというのがどうも……」と、やっぱり釈然としないかもしれませんね。

外国為替取引を実際に始めると、このような疑問が再び、ふつふつと沸いてきます。そんなときには、通貨ペアの名前の最初に来る通貨を軸と考えてください。

**ドル／円であれば「軸はドル」**ですから、「ドルが円に対して買われる（上がる）」「ドルが円に対して売られる（下がる）」と考えると、為替レートとの比較でも悩むことはなくなるでしょう。そして、**通貨ペアは2つの国の通貨が常に「綱引き」をしている**と覚えてください。

## ▶▶為替レートは日常生活に直結していることを思い出して！

すでに書いたように、外国為替取引は日常の生活に非常に近い存在です。ちょっと迷うことがあったら、日本人にとって、旅行やブランド品を買う



ときに、円高が有利か円安が有利かを思い浮かべてください。

円高のときに思い浮かべるのが、スーパーや百貨店が輸入食品などを「円高差益還元セール」と題して安売りするときです。

長梅雨や猛暑で野菜の生育が悪く、値段が高騰するときがあります。そんなときに円高になると、国内産のレタスが400円もしているのに、輸入レタスは100円で売られたりしています。

また、石油の価格が高騰していても、円高になっているときには、ガソリンの値段がそれほど値上げされないときがあります。レタスだと、無農薬やら何やらで作り方や鮮度によって値段が変わるかもしれませんが、しかし、ガソリンの質は基本的に同じですから、消費者は円高の恩恵を受けていることになります。

このように、「円高・ドル安」のときは、輸入食品やガソリンの値段の動きを思い起こせば、簡単に分かるでしょう。どちらか一方を軸にして覚えれば、これから迷うことはないのでは？



## 第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

## 008

## どんな目的で外国為替取引を利用しているの？【1】

外国為替取引といっても、特徴や性格によって大きく4つに分けられます。モノやサービスが伴うかどうか、単にお金を殖やそうとする取引かなどです。それぞれの立場の人たちが、どのような目的で外国為替取引をしているかを理解することは、市場の動きを予測するためにはとても重要です。

外国為替がだいぶ、身近なものに感じられてきたのではないのでしょうか。今度は、どんな人たちが外国為替を利用しているかを考えてみましょう。

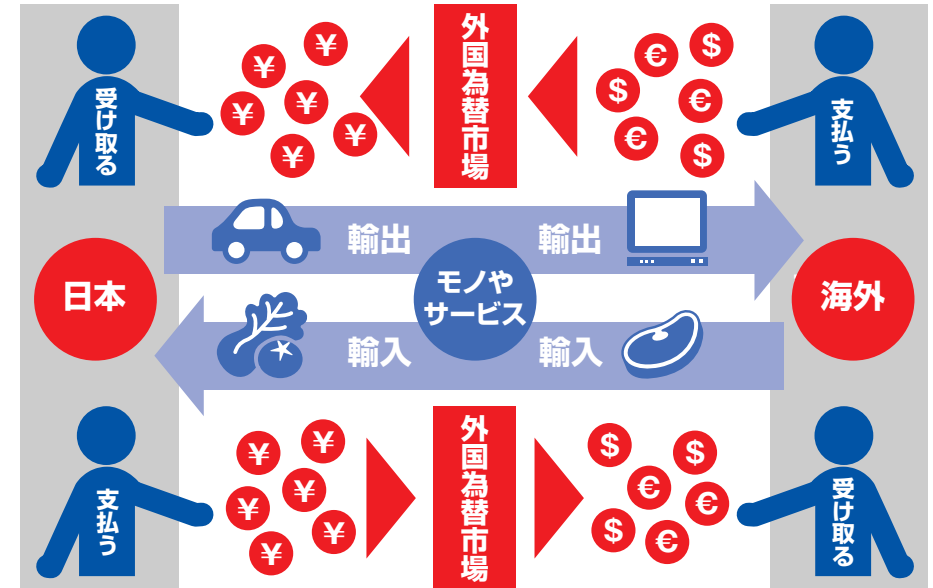
## ▶▶海外とのお金の受け取りや支払いで利用する「貿易取引」

外国為替取引には、世界各国のさまざまな人たちが関わっています。たとえば、前項の「円高還元セール」に象徴されるように、海外からモノを輸入する企業が思い浮かぶでしょう。

逆に、日本で生産した自動車や家電製品などを海外に輸出する企業も外国為替取引を日常的に利用しています。**輸出や輸入をする企業が外国為替取引をすることを「経常取引」とか「貿易取引」といいます。**自動車や家電製品、野菜や石油といったモノだけでなく、サービスも含まれます。

**また、モノやサービスを売ったり買ったりするために外国為替取引を利用していることを「実需」といいます。**代金の支払いや受け取りに外国為替取引を使っている、つまり取引に実体があるわけです。

## ▶貿易取引



貿易取引の特徴は、企業が海外との間で輸出や輸入をする以上、1年を通してコンスタントに外国為替取引を利用していることです。

海外への支払いをドルにするためには、円をドルに両替しなくてはなりませんし、受け取ったドルやユーロを日本で使うには、それぞれの通貨を円に交換しなければなりません。

また、大企業が海外に子会社を持っているときなどは、9月末や3月末といった企業が決算をするときや、場合によっては毎月末に、その海外子会社が持っているドルやユーロを円に替えて日本の本社に送金します。

毎日毎日送金するのは手間だけでなく費用もかかりますから、ある程度まとめるわけです。そのため送金が重なる時期は、円安傾向のときでも一時的に円高になったり、円高傾向のときには、それがより顕著になったりします。ちなみに、日本に限らず、外国からお金を本国に戻ってくることを「レパトリエーション（資金回帰）」といいます。これからは、ニュース報道で、この言葉を目や耳にする機会が増えることでしょう。

## 第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

## 009

## どんな目的で外国為替取引を利用しているの？【2】

個人なら外国の株式や金利の高い国債、企業ならユニークな技術や特徴を持つ会社を買うなどの目的で使われるのが資本取引です。外国の資産を買うわけですから、円高のときが有利です。ただし、こうした流れがブームになると、だんだん円安傾向になることがあります。

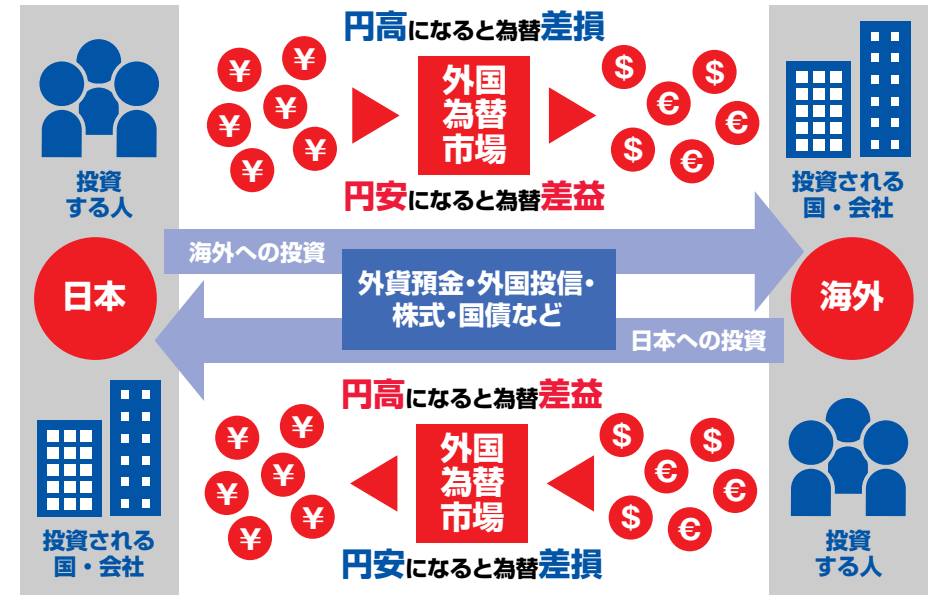
海外との間でモノやサービスを売ったり買ったりしなくても、「実需」といわれるものがあります。いわゆる「海外投資」です。

## ▶▶ 海外の会社や国債に投資するときを利用する「資本取引」

「投資」というと、ちょっと難しい感じがするかもしれませんね。たとえば、個人が外国の会社の株や投資信託を買いたい、海外に優秀な会社があり、それを日本の企業が子会社にするために出資したいというときにも、外国為替取引を利用します。外国の会社の株を買ったり、出資したりするためには、その会社がある国の通貨に替えなければ投資できないからです。これを「資本取引」といいます。日本の国債や預貯金の金利が極端に低いため、個人投資家の間でも金利の高い海外の国債や投資信託に人気が集まっています。これも「資本取引」に入ります。

こうした「資本取引」には、ちょっとした流行があります。たとえば、円安傾向にあるときにアメリカの国債に投資しようとする、円をドルに

## ▶ 資本取引



替えなければなりません。長い期間、円安・ドル高になれば、金利を受け取ることができるだけでなく、「為替差益」も手にすることができ、一挙両得になります。

こうした動きがブームになると、それだけで外国為替相場が動いてしまうことがあります。しかも、投資目的で円をドルやユーロに替えるわけですから、投資をした個人や企業は長い期間、資金をそのままにしておくケースが多く、短期的には一方通行の取引になりがちというわけです。

ところが、外国への投資額が非常に大きくなっているにもかかわらず、円高・ドル安の流れになれば、投資家は「為替差損」を抱えることとなります。そうすると、金利を受け取ったものの、為替を含めると損失になってしまい、投資していた外国の国債を売るだけでなく、買っていたドルやユーロを円に替えるという、それまでとは逆の流れになってしまいます。

最近では、外国の会社を買収したり、石油などの資源を確保したりする動きが見られますが、これは円高を利用しているわけです。

## 第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

## 010

## どんな目的で外国為替取引を利用しているの？【3】

何かを買う目的で外国為替取引をする「実需」に対し、外国為替取引だけで利益をあげようとするを「仮需」、つまり「投機取引」といいます。また、政府や「通貨の番人」といわれる中央銀行が、主に急激な相場変動をくい止めるために資金を投じることを「公的取引」といいます。

ここまで、外国のモノやサービスを売ったり買ったり、投資をしたりする目的で外国為替取引を利用する「実需」を解説してきました。今度は、実需が伴わない2つの取引を紹介しましょう。

## ▶▶ 外国為替の値上がりや値下がりや利益を狙うのが「投機取引」

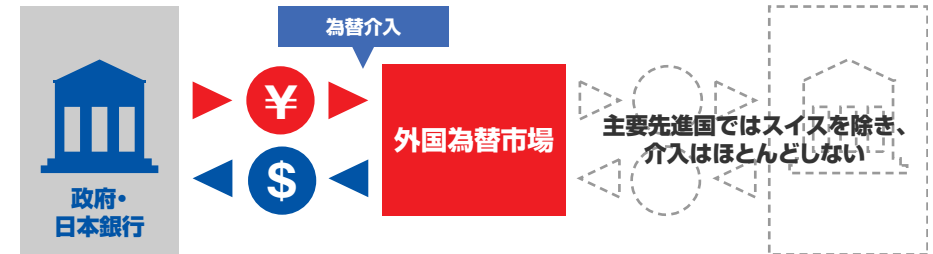
外国為替や外国の株式を売ったり買ったりして利益あげようという取引を「投機取引」といいます。「資本取引」と似ていますが、「投機取引」は「モノやサービス、外国の国債や株式など何かを買う」という目的で外国為替取引を利用するわけではありません。つまり、外国為替や株式の値上がりや値下がりや利益をあげようとする取引です。実は、これが世界の外国為替取引の大半を占めています。

FXも「投機取引」に分類されます。「投機」というと、「ギャンブル」や「ハゲタカファンド」のイメージが強いかもしれませんが、でも、あまり気にしないでください。銀行の為替ディーラーはこれを仕事にしているわ

## ▶ 資本取引



## ▶ 公的取引



けですし、投機取引は決して悪いことではありません。

ところで、FXを始めると、「投機筋」という言葉をよく耳にするようになります。「投機筋」とは、多くの場合、企業や少数のお金持ちから資金を集めて運用する人たち、つまり、「ヘッジファンド」や「投資ファンド」を運用する人たちのことです。外国為替市場がダイナミックに動く原動力となるのが投機筋で、彼らの動向をうまく予測すれば、皆さんの大きな味方になることだってあります。

## ▶▶ 政府や中央銀行が外国為替を取引する「公的取引」

急激な相場変動（円高や円安）により経済の悪化が心配されるときがあれば、**政府や中央銀行（日本では日本銀行）が外国為替市場に莫大な資金を投じて相場変動をくい止めようとします。**これが「公的取引」で、ニュース報道などでは「為替介入」といわれます。最近の日本では、2010年9月や2011年3月、8月、10月に為替介入が実施されました。

## 第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

## 011

24時間、世界を駆けめぐる  
外国為替市場

外国為替市場は世界最大の金融市場ですが、同時に24時間、途切れることなく取引されることも大きな特徴です。これは株式や国債を取引する市場ではあり得ないことです。24時間眠らないということは、個人投資家はライフスタイルにあわせた取引ができるため、とても魅力的です。

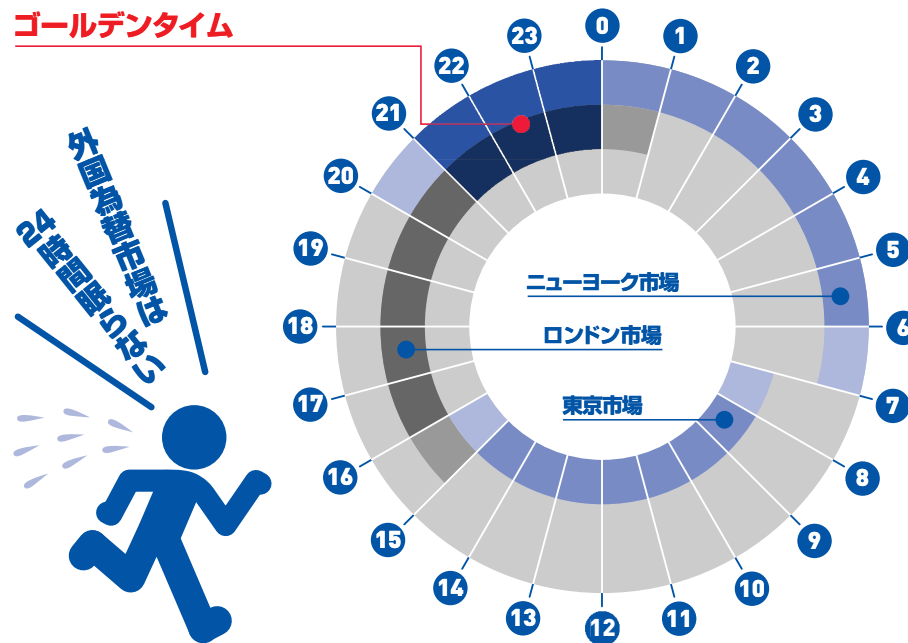
外国為替を取引するところを「外国為替市場」といいます。「市場」といっても、ほとんどがコンピューターを介しての取引で、どこかビルの一角に「市場、があって「競り」をしているわけではありません。

一昔前のニュース番組では、短資会社という外国為替取引を仲介する会社の人たちが何本もの電話を持ちながら、小さな板をやりとりしている映像が流れることがありました。しかし、最近はコンピューター取引が主流になったため、外国為替相場が急激に動いたときの風物詩的な光景は、あまり見られなくなりました。

ところで、外国為替市場は「インターバンク市場」と「対顧客市場」に分けることができます。

インターバンク市場では、銀行などの金融機関同士が直接、外国為替をやりとりしたり、短資会社を経由して取引したりします。一方の対顧客市場は、大口であれば輸出や輸入をする企業、小口であれば両替えなどをする個人が利用するものです。このように**外国為替取引は世界のどこかで常**

## ゴールデンタイム



に行われているため、外国為替市場は24時間眠らないといわれるのです。

## ▶▶最も取引が多いのは東京、ロンドン、ニューヨーク

1日の最初の取引は、日本時間の早朝4～5時頃にニュージーランドの首都ウェリントンで始まり、遅れてオーストラリアのシドニー市場が開きます。そして、朝の8時頃には東京での取引がスタートします。

日本時間の午後3～4時頃にはロンドンで取引が始まり、さらに夜の8～9時頃からはニューヨーク市場が開きます。そして、早朝にニューヨークの取引が終了すると1日の取引も終わります。これは世界共通です。

**取引参加者と金額が最も多い3つの取引時間帯は、「東京時間（市場）」「ロンドン時間（市場）」「ニューヨーク時間（市場）」**です。中でも、世界最大の取引量を誇るロンドン時間と、第2位のニューヨーク時間が重なる時間帯は「ゴールデンタイム」といわれていて、1日のうちで最も活発でダイナミックな取引がおこなわれます。

## 第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

## 012

世界最大の金融市場だから  
メリットがいっぱい

取引量が他の金融市場に比べて比較にならないほど多い外国為替市場には、いくつかのメリットがあります。このメリットを最大限に活かすことが何よりも大切です。取引に慣れてくると、目先の利益ばかりを意識して、このメリットを忘れがち。忘れないようにしてくださいね。

すでに書いたように、世界の外国為替市場の取引量は1日でおおよそ4兆ドル、日本円にして約300兆円にのぼる世界最大の金融市場です。それだけ多くの人たちが取引に参加しているだけでなく、市場は24時間眠らないわけですから、当然かもしれません。しかし、市場の規模が300兆円といってもピンとこないですよ。

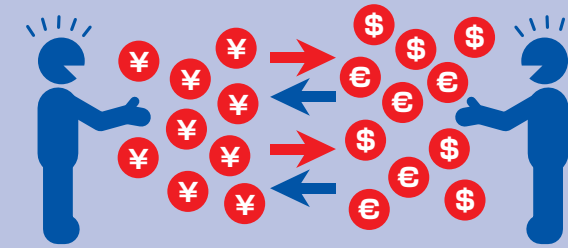
世界で指折りの規模を誇る日本の株式市場は、最近の取引額は1日で1～2兆円程度、少ないときは5,000億円程度。最盛期でも5兆円を超えるくらいでしたから、外国為替市場の大きさが分かるというものです。

## ▶▶取引量が多いほどスムーズな取引ができる

ちょっと難しい話になりますが、**取引量が多いということは、1つひとつの取引が連続している**ことになり、これを「**流動性が高い**」といいます。

これはすごく大事なことで、買ったり売ったりしたいときにきちんと取引できることに他なりません。**外国為替取引の半分弱を占めるユーロ／ド**

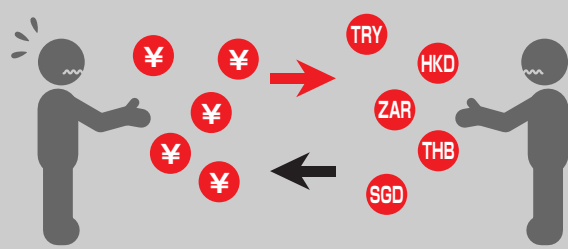
## ▶取引量が多いと……



動きが滑らか



## ▶取引量が少ないと……



動きが荒い



ルとドル／円は、**流動性が高い分、スムーズで安全な取引ができる**わけです。取引量が極めて少ない南アフリカのランドやタイのバーツなどは「流動性がかなり低い」ため、思うような取引ができないときがあります。

## ▶▶取引量が多ければ為替レートの動きも滑らか

取引量が多いと、買いたいときや売りたいときに思うように取引ができるだけでなく、為替レートの動きも滑らかです。これも非常に大切です。

実際にFXを始めて慣れてくると、荒い動きをする、つまり流動性の低い通貨ペアで取引したくなります。これらは為替レートがジェットコースターのように動くため、儲かる感じがするからです。しかし、動きが荒ければ荒いほど損をする危険性（リスク）も高くなります。この点は、あまりFXの入門書にも書かれていないため、個人投資家は軽視しがちです。

**「外国為替取引は高い流動性の通貨ペアでゆっくり利益を狙う」**。これが基本と心得てください。



# 「円高」になると、どうして日本は不況になるの？【1】

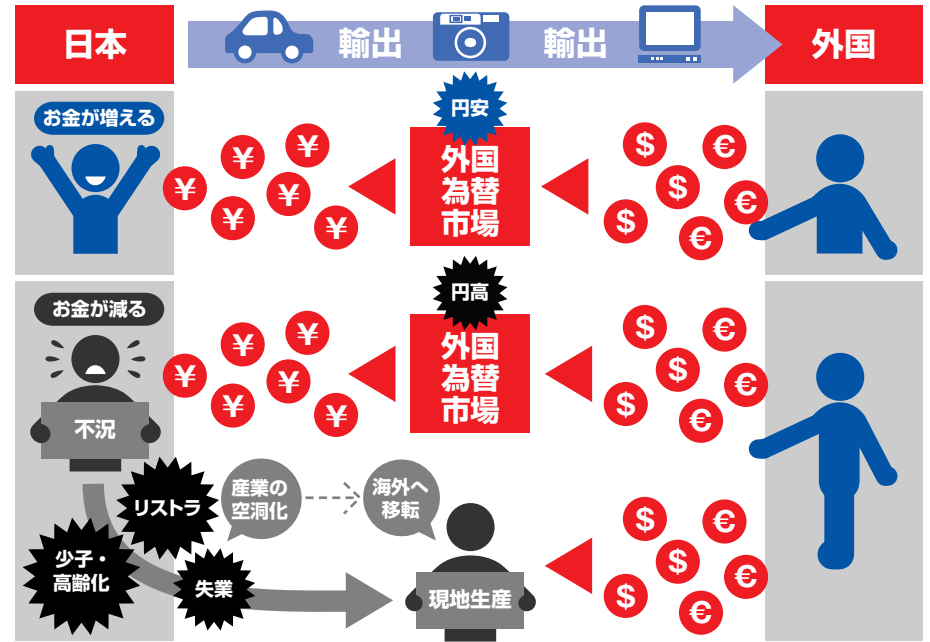
FXをするときに、切っても切れないのが日本や海外の経済事情です。外国為替取引の仕組みだけでなく、ちょっとした経済や金融の仕組みを知ることが、取引に役立つだけでなく、日々の生活も豊かになります。このコーナーでは、経済や金融について分かりやすく解説していきます。

外国為替相場と日本経済の動向には密接な関係があります。日本には資源がないため、それを輸入して自動車や家電製品などを作り、国内で販売するだけでなく、広く海外にも輸出して経済が発展してきました。

しかし、日本は少子・高齢化が急速に進み、国内の景気がよくなる傾向にあります。年齢の若い層が結婚すれば、家具や家電製品を買うでしょう。そして、しばらくすると家を建てたりマンションを買ったりします。ところが、若年層が減っているため、消費は盛り上がりません。

一方、高齢者は年金問題や健康保険の負担増により将来の不安が高まり、長生きをすればするほど、将来的な支出に対して不安が募ります。これを「長寿リスク」といいます。そのため、たくさんの貯蓄があっても、あまりお金を使おうとしません。こうなると、企業は国内より海外でモノやサービスを売ろうとします。

ところが、こうした状況で急激な円高になると、ドルやユーロより円の価値が上がってしまうため、海外で受け取ったお金を両替しようとしても、



思ったより少ない円しか受け取れません。同じ仕事をして、同じ製品を売っても、為替レートが円高になるだけで、手取りが減ってしまうわけです。

そうなれば、企業に務める社員の給料は上がりません。場合によっては、ボーナスが減ってしまいます。また、輸出企業は手取りが減って業績が落ちれば、社員の採用を減らしたり、下請け企業に値引きを迫ったりしますから、国内にいる人たちの収入も減ることになります。

収入が減ったり、就職できない人が増えたりすれば、モノや家を買ったり、レジャーにお金をかけたりすることを控えてしまいます。一昔前は、急激な円高になって一時的に経済が停滞しても、国内の消費が盛り上がることで克服してきました。しかし、21世紀に入ってからは、少子・高齢化の進展で国内の消費は盛り上がりせず、不景気が長引いているわけです。

最近では、急激な円高に耐えかねて、自動車メーカーなどが海外生産を加速し、日本車を逆輸入する動きも出てきました。そうなれば、ますます日本での働き口が減りますから、不景気が長引く可能性が高まっています。